閉ざされた青春

ナチの魔手を必死で逃がれた
少女ジョルジェットの体験記

ジョルジェット・エルジイ
石井清子:訳

閉ざされた青春　　© 1978

著　者　ジョルジェット・エルジイ
訳　者　石　井　清　子
発行者　海老名　　潔
印刷所　東京創文社印刷所
カラー印刷　㈱博　文　堂

発行所　東京都港区南麻布1—3—15
電話　東京（451）2464
振替　東京　7—8486 7
文陽社

* 定価・発行日の表示はカバー袖にあります。
* 落丁・乱丁本はお取替えします。

0093-2021-7396

目次

ジョルジェットの生い立ち……1
パリを離れる一家……40
オルテーズの軟禁……57
弁護士夫人の来訪……62
オルテーズの日々……73
親切だったゲシュタポの男……77
ポウで見たフランス国旗……86
私の学校問題……98
こわいドイツ兵がやって来た……115
売春宿に泊った私たち……117

母と姉のレジスタンス……123
リヨンの学校……131
気の狂った哀れな伯母……137
追ってくる恐怖……148
戦争の終わりが見えて来た……168
なつかしいわが家へ帰る……180
エリーの死！　結びの言葉は《希望》……185

カバー絵＝伊藤信義
口絵＝水谷紀弘

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ジョルジェットの生い立ち

私がようやく窓をあけ放して眠ることができるようになったのは、一九六五年を過ぎてからである。

戦争が始まったとき、私は十歳だった。私の家庭はいくらか複雑だったが、それでも私は子供のときからきわめて大切に保護されて育った。物質的な不自由というものは誰でもが一応経験するものなのに、私の場合には全くそれがなかった。政治や宗教の問題で家族間の意見が対立するということも絶えてなかった。私はカソリック教徒で、生まれ落ちたとき直ちに洗礼を授けられた。宗教教育のためにはイエズス会の神父さまが家まで来てくださった。私に贈られた最初の宗教上のプレゼントは、恒例によって洗礼式のあとに行なわれた午後のレセプションで展示された。その中には共和党総裁・アルベール・ルブラン氏と、ペタン元帥からの二冊のミサ典書もまじっていた。私の母方の祖父は、ルブラン氏と同じく工兵隊に籍をおいていた。第一次世界大戦前夜は、当時陸軍大佐だったペタン元帥と共に、アラースに駐屯していた。プ

レゼントの中で、もう一つ私の記憶にのこっているのは、妙な形をしたブローチで、フランス国旗の色で染めわけられた皮の太鼓がついていた。そのブローチには、「祖国のために祈ることを忘れるな」という言葉が添えてあった。とにかく私はカソリック教徒なのである。

祖先の中に何人かユダヤ人がいたことを知らないわけではなかったが、私はそのことを気にもせず、また、それで悩んだこともなかった。

私の祖母は、自分の祖父、つまり私の高祖父についていろいろな話をくりかえし私に語って聞かせた。この高祖父は有名な医者で、祖母の誇りであった。彼はユダヤ人であったが、自分の子どもたちに「主の祈り」を唱えることを教えた。「主の祈り」こそこの世で最も美しいものと信じていたのだ。

祖母の話によると高祖父は行商人の子としてアルザスで生まれた。祖父はユダヤ教の牧師であった。六人の兄姉と四人の弟妹にかこまれていた。一家は貧困のどん底になやみ一足しかない靴を子どもたちは交替ではいて学校に行った。裸足で登校するわけにいかないからである。彼は十五歳になると裕福な友だちの家庭教師をして、学費を自ら稼ぎだしていた。軍医になるつもりだった。一八三七年、二十八歳で彼はパリの Val-de-Grâce（バル・ド・グラアス）バルドグラアス陸軍病院に奉職した。四十一歳で医学界で最高の地位、医学アカデミーの会員になった——マルセーユの陸軍病院には、今でも彼の名がついている。栄誉をきわめた時点で彼はロレーヌの有力な実業

家の娘と結婚した。相思相愛の結婚であった。妻は財産相続人でもあった。

彼が亡くなった時、その娘つまり私の曾祖母は、クリミア戦争に出征した彼が妻に書き送った七通の手紙を一冊の本にまとめて出版した。著名人や、知人の名は編集者と相談の上イニシャルだけにしてあった。この本は面白かった。

私たちのアパルトマンには客間が二つあり、その大きい方にはルイ十五世、十六世時代の家具が並んでいた。部屋の隅に古風なうるし塗りの小さなテーブルがあり、イタリア風と北アフリカアラブ・スタイルをミックスした面白い形をしていた。一八六〇年にアルジェで主任軍医として勤務していた高祖父のために、同じ陸軍病院で働いていた尼さんたちが皆で作ってプレゼントしてくれたものだった。

私はごく小さい頃から読み方を教わった。「良い子にしてたら読み方を教えてあげますよ」と祖母はよく言ったものだった。私は祖母のひざに抱かれてアルファベットの不思議な世界につれて行かれた。それは二、三分間かせいぜい日に五分程度だった。一番初めに私が覚えた文章は「主の祈り」と「鰐の泪」という昔話であった。これは「子どものために」と題した本の一番最後にのっている話で、ノーベル医学賞を受賞したヒューマニストの「古い友人」が著者である。彼はその著書を一冊、私にプレゼントしてくれたのだ。「小さなジョルジェットへ」と書いて、その後へ署名してある。その名は当時訴訟問題になっていたから、私もここでは、

伏せておくことにする。これは私に寄贈された初めての本だった。まだ四歳になっていない私にとって、これはまことに身にあまる贈り物だった。私は大学通りにある著者のアパルトマンへ連れて行ってもらった。すばらしい書斎で、私は暗誦していた言葉をくりかえした。「鰐の泪……」。老いたる友は私にキスをしてくれた。

戦争が勃発した時、休暇でジュラにいた私たちは、コート・ダジュールのサン・ラファエル滞在の予定を中止して、すぐパリに戻った。フォニイ戦争（訳注＝第二次世界大戦中、英仏連合軍及び独軍が、マジノ線とジーグフリード線をへだてて攻撃らしい攻撃をしなかった期間。一九三九年九月から一九四〇年五月まで）のはじめの一、二週間、人々がガス・マスクを持って外出していたのを思い出す。それから灯火管制も記憶にのこっている。夕方、暗くなるとすぐ、人々は注意ぶかくカーテンを下ろしたものだった。

五月から六月にかけてパリは無人の町になりつつあった。交際のあった人々も皆、パリを離れようとしていた。しかし子どもたちを南西部のボルドレのようなドイツ軍のこない安全な所とか、爆撃の恐れのないシャルトルのような町々へ疎開させるようになったのはもっと後のことである。しかし、私の祖母は疎開のことなど一向に考えなかった。戦争の間は家にじっとし

ていればいい。祖母はこう考えていた。しかし六月四日か五日になってレノオウ政府の閣僚で母の顧問弁護士をしていた人が、母にケ・ドルセ迄来てほしいと要請して来た。母が出向くと、弁護士は、自分の末の息子が戦闘に参加して戦死したことを述べてから、祖母と共にパリを離れるようにと懇請した。戦争はながびくだろうし、万一パリがナチの手に落ちるようなことになれば大変なことになるというのが彼の意見だった。

私たちは幸運にも、最後の列車でパリをはなれることが出来た。出発の朝になって祖母は私に小さな美術品をくれた。それは卵形の透明な孔雀石で宝石箱のように開けることが出来た。祖母が夫から贈られた最後のプレゼントの一つだった。

「あなたにあげるから、なくさないようにするんですよ」

私はそれを手提袋の中にしまった。旅行中、私は耳が痛くて苦しんだ。旅は長く、辛く、果てしもないように思われた。事実、旅は五、六日はたっぷりかかり、ピレネー山麓のポーで、私たちは大きなホテルのラウンジで眠った。

翌日、ホテルのポーターがレ・ゾ・ボンヌに泊れるところを見つけてくれた。

私たちはこの町で一九四〇年の夏を過ごした。いろいろな出来事が私たちをひどく悩ませ

た。私は家族と悲しみをわけ合ったが、自分では大して悲しいとは思っていなかった。

ドイツ軍の勝利を苦々しくは思っていたが、それがなにを意味するかは、はっきり判っていなかった。

八月のある日、私は人々の間でド・ゴール将軍の名がささやかれているのを聞き、ド・ゴールという名のひびきのよさにびっくりした。それだけのことだった。私は散歩に出かけたり、同じ年頃の子どもたちと遊んだりしていた。ブリッジを覚えたのもこのころで、教えてくれたのは母と姉、それから祖母の友人の孫で、当時ポーに駐在していた若い軍医将校の三人だった。この若い軍医は、レ・ゾ・ボンヌへ足しげくやって来た。そしてポーを去る時、私に飾りのある木製のトランプ用ケースをくれた。飾りはバスク人夫婦の肖像画で、見るもおそろしい様子だったけれど、私はすばらしいと思った。

祖母にとっては、自分の家へ帰れないという意識は耐え難いものであった。当時、ビシー政府とドイツ軍当局は、逃亡した人々に対して家に戻るように呼びかけていた。そしてその線にそって政策がとられつつあった。ドイツ軍は、ユダヤ人が占領地区に近寄ることを禁止していた。しかし私たち一家は、占領軍の意向を余り深く考えなかった。というのもナチの占領がどんなものか、何を意味するのかを、当時の私たちは全く知らなかったからだ。ユダヤ人に対して迫害があろうなどとは考えもしなかった。祖母にしても自分はフランス女性だという確信が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あり、現にそうなのだから、疑いようがなかったのだ。

汽車でパリへ帰ることはまず出来ない相談だった。そこで私たちは、セールスマンの言葉を信用してシトロエンの中古車を買い入れた。この車は七つ年上の姉が運転することになった。ガソリンの配給許可も貰った。しかし、ドルドーニュのベルジュラックに辿りついた時には、早くも一滴のガソリンも残っていなかった。ガソリンタンクに穴があいていたのだ。穴を修理し、警察にたのんでガソリンのクーポン券を再発行してもらわなければならなかった。母は闇のガソリンを探し始めた。ガソリンを求めて無駄足をはこび、打ちひしがれてあきらめかけても足の方が自然に動き出してしまったのよと、後になってから母はこの時のことをこんな風に語った。どうやらガソリンは手に入った。ところが、リモージュの太鼓橋の上で、今度は後ろの車軸が折れてしまった。修理の出来る人を探さなければならなかった。どういうわけかこうした車の故障というような出来事を私は妙にはっきり覚えている。占領地区と非占領地区を分ける境界線を突破した時のことよりも生き生きと想い出されるのだ。交通は渋滞していたけれど、問題はなかった。制服姿のドイツ兵を見ておどろいた記憶もない。

パリのトウキョウ通りに着いた。私たちのアパルトマンは出発したころのまま、何一つ変わ

ってはいなかった。私は自分の部屋へ駆けこみ、五、六週間の間、閉めきっておいたシャッターをあげてバルコニイに出た。なつかしい家に戻って私は興奮していた。しかし、プレジデント・ウィルソン大通りを歩いているドイツ兵を見下したとき、私のはずんだ心は一ぺんにしぼんでしまった。「とうとうドイツ兵を見たんだわ」と心につぶやきながら部屋に入った。

母は若いころの一年半を英国ですごした。そのためか熱烈な英国びいきであった。母は今日でも客を対手に英国を弁護して大いに弁ずることがある。メール・エル・ケビイルの問題に関してさえ弁護するのだ。当時の母は一瞬たりとも英国の勝利を疑わなかった。その固い信念の裏づけとして母はよく私の代母であり名付親になった人のご主人の言葉をひき合いに出したものだった。彼は医者で、一九四〇年六月以降、くりかえしナチの敗北を予言していた。祖母の方は、気持ちの安定を欠いていた。ドイツの降伏を心から祈りながらも同時に、個人的に交際のあるペタン元帥（訳注＝フランスの陸軍元帥で一九四〇年の敗戦に際し対独協調の政権〈ビシー政府〉を樹立し、その主席に就任した。戦後、戦犯として終身刑。一八五六――一九五一）は非難したくないようだった。

一九四〇年から四一年にかけての冬は寒かった。家族一同が角のヘレン伯母の大きな部屋へ集まって過ごした。この部屋は室温を華氏五十度に保つことが出来た。寒くなってくると、いつも私は室温が0度かそれ以下になっている客間を駆けまわった。客間の天井は高く、十三フィートもあった。それに較べるとヘレン伯母の部屋の暖かさは天国のようだった。伯母は母より十四歳年長だった。

ハットメエル学院への通学は、母か女中が付き添ってくれた。地下鉄に乗って六つ目の駅でおりればいいのだから、私は全く過保護に育てられたのである。地下鉄はひどい混雑だったが私にとっては、素晴らしい冒険のように思われた。私は一年前にクラスで首席になり、その褒美として望み通り地下鉄通学を許されたのだ。

ドイツ軍の占領下最初の冬をおびえて暮らしていたかどうか、私は覚えていない。毎朝八時に家を出て学校に行く。午前八時でもまだあたりは薄暗い。ドイツ時刻を採用していたからである。テキストはあちこちがカットされ、また何個所かは綴じて読めないようにしてあった。

何故そうなっているのか不思議だった。またドイツ選集の中で、ローレライの作者が不詳としてあった。これも理解に苦しんだ。ローレライの作者はハインリッヒ・ハイネであることは誰でも知っていた。学校の先生はハイネがユダヤ人だったからだと説明した。だが私にはその意味がのみこめなかった。

このころユダヤ人は法令によって登録しなければならなくなった。私にはやはり納得できない出来事だった。何故ユダヤ人は登録しなければならないのだろうか？　このことで、祖母と母と伯父との間で烈しい議論が交わされたのを私は今でも覚えている。話はそれるが、伯父は、母の姉の夫で、士官学校と工芸大学を首席で卒業した。本人に言わせると、なんとかして首席にならないように努力したのだそうである。鉱山の検閲総監を最後に引退し、以後、何もしなかった。五十回目の誕生日を迎えたあとは、ただ並はずれた威信を楽しんでいるように思われた。五十歳の誕生日に伯父が、「やれやれ、半世紀も生きてきたよ」と言うのをきいた。その時私は四歳だった。ポール伯父が半世紀もの長い年月をひとり占めにして生きてきたということが、途方もないことのように思われた。

あれは一九四〇年の秋だった。母たちはユダヤ人法について議論するため、よく私を部屋の外へ出した。子どもには判らないことだからという理由だった。祖母と母は友人たちや私の代母夫妻にこのことを相談した。私の目にはこの代母が完璧な女性として映っていた。何処とな

く、ズバぬけたところのある人だと思っていたのだ。代母の方も私を甘やかしていた。しかし時には代母に反抗することもあった。もちろん、ホンの一寸だけであったが！――私が八歳の時だった。サンタクロースは空想の産物だと代母が言った。私が反抗したのはこの時だったのだ。さて、祖母は登録しないことに決定した（最初から決心していたことなんだけれども）。ある程度は計算が入っていたことは明らかだった。しかし本質的な問題もからまっていた。というのは、彼女が属していたのはひどく排他的で外人嫌いのユダヤ上流社会であったからだ。残念ながらフランスでセム語族、特にユダヤ人に対する反感が下火になったのはごく最近のことにすぎない。祖母は占領軍の法令に違反した場合、どんな恐ろしい危険な目にあうか、全く気が付いていなかった。せいぜい罰金程度だろう。衆知の通り、ユダヤ人は、何世紀にもわたって祖国フランスのためにつくしてきたのだ。その目覚しい手柄は誇ってもいいくらいだった。しかも個人的に親しいペタン元帥もいた。

今、出来るだけ正確に我が家の当時の雰囲気を再現しようとして、その非現実性に私はギョッとならざるをえない。だがしかし、それが正にあの時の状態だった。当時の社会的環境の中にあって私たちに別の在りようはなかった。

災難が私たちを待ちかまえていたけれども、知る由もなかった。先祖がユダヤ人だったというだけの理由で、私たちは苦痛や危険に直面した。これは理解を越えることだった。ユダヤ人

を先祖に持ったからといって、なぜ、自分たちだけがドイツ占領下で他の人々と異なった経験をしなければならないのか、そんなことは考えたこともないのに、どうして想像出来るだろうか？　「ユダヤの血統」のために、ドイツ軍は私たちを目の仇にした。しかしそういう運命をだれが予知し得ようか？　それは正に予測不能の災厄だったというより仕方がないだろう。

私たちの行為は非現実的であったかもしれない。しかしそれもまた良かったのではないかと私は考えている。そのわけを説明しよう。すべてが終わった今になって、ナチ迫害の犠牲者を批判するのはたやすいことだ。ナチによる狂暴な反ユダヤの嵐が吹きまくっている時代に身をおいているのだから、危険を予知するだけの先見の明があってもよさそうなものだ。人々はこんなことを口にする。しかし、あのような迫害、物凄い恐怖と狂気、古今未曾有の狂気、科学的な方法で、「科学」の名において、何百万人の人間を根絶やしにすること――そんなことを予想しうることが狂人以外に果たして可能であろうか。

占領下、初めの頃の十八カ月間を私は平凡な女学生としてすごした。クラス・メートと一緒にルナ・パークのお祭りに行ったりした。私の記憶は平凡な子ども時代の思い出がゴチャゴチャとまざり合っている。とはいっても、やはり数々のいまわしい想い出がその中からひょいと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com